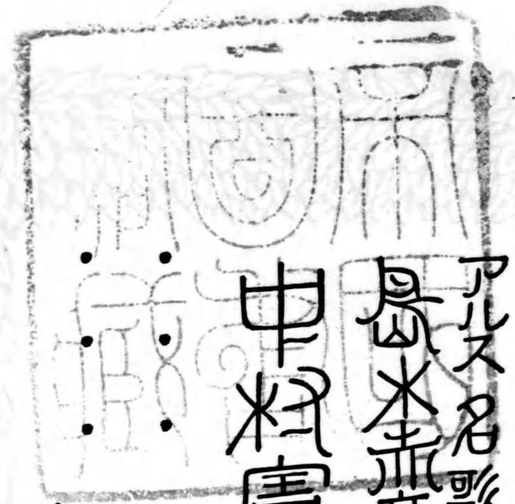
特100
863

特100
863



アルス名歌選第六篇

島木赤彦選

中村憲吉選

大正
10 11.22
内交

軒ゆふの息とそ
足ゆれもの言ひて
人に親しき冬近
づく

憲吉

アルス名歌選第六編

序

明治三十年代以後新派と言はれて流行した歌は其の表現が多く表面的であつた。これは物質觀を中心としてひらけた今の世に自然にあり得べき現象である。物質觀の要求するものは目に見えるものである。目に見えるものの要求は外面に竝ぶものの要求である。外面に竝ぶものを要求する今の世の中へ表面的な歌の生れることは自然な現象であると言はねばならぬ。それゆゑに脂粉の臭ひと紅紫の色に飽いたといふ第二期の新派歌人も、程度の違ひこそあれ求む

るものは依然として表面的なものであつた。象徴を標榜する歌人は象徴的な詞と材料を羅列することに依つて容易にその用を辨じた。感激を唱道する歌人は感激の際に發する詞聲を用ゐる外には餘り面倒な手數を要しなかつた。感激の詞聲を用ゐれば感激の歌になり、神祕的な詞句を用ゐれば神祕な歌になり、悟りの物言ひをすれば悟りの歌になつて通用するのが今の世の便利な所である。左樣な中に在つて中村憲吉君の歌は違ふ。

中村君は元來柔かく微細な神經をもつてゐる人である。左樣な神經の豊かなる所有者として君は殆ど當代歌人中に

稀有である。斯る神經の所有者から生れる歌に感覺的氣分の多いことは當然であるが、君の歌の特色を單に感覺的色調の豊かさによつて定めることが出來るとすれば君の歌の持つ價値は當代有り觸れたものの程度を強めたものに過ぎぬことになる。小生は中村君の歌を左樣に認めてゐない。元來感覺は感覺夫れ自身としては單なる末梢神經の動作であつて全心的なものから見れば要するに末梢部の動きに外ならない。從つて單なる感覺の現れは夫れが豊富に現れれば現れるほど表面的意義を多量に持ち易くなるのである。斯の點から言へば中村君の歌は當世流の表現になり易い條

件を多く持つてゐると言うてもいゝ。當世流の外面的表現になり易い條件を多く持つてゐながら夫れが外面的に終らないところに中村君の特色がある。其所まで見なければ中村君の歌を理解してはゐないのである。本來から言へば感覺の働きを中樞部の働きから取り離して考へることは出來ないことであらう。感覺の現れが外面的感受を與へるに止まるといふことは言ひ換へれば中樞部に重大な主觀が働いて居らぬといふことになるのであらう。深い主觀と交流する感覺は夫れが豐富微細に働けば働くほど其所に内面的意義が深く現れてあるべき筈である。實際中村君の歌に動く

神經は夫れが末梢的に微細であればあるほど中樞的に君の魂魄と交流することの愈深いことを感じさせる。君の歌に動くものは末梢神經にして末梢神經ではない。感覺の下に深く潜んだ心がある。その深い心が常に君の感覺の中に滲み出てゐるのである。夫れゆゑ中村君の歌は感覺が豐富微細でありながらめそ〳〵泣かない。うか〳〵浮かない　恍惚語も深長語も吐かない。詩人顔をしない。めそ〳〵泣く前に、うか〳〵浮いたり跳ねたり取り濟ましたりする前に夫れよりも重大な主觀が先づ働くのである。その主觀の働きが中村君の歌の命であつて、その命が君の豐富な感覺の

中に常に充滿し浸潤して現れてゐるのである。中村君の歌が當世流の歌と違ふのはその點である。

中村君の歌を小生は前述の如く見てゐる。さうした君の特徴の或る頂點に達したものは大正五年の「磯の光」前後にあると思はれる。明治四十一年頃から胚胎したものを「磯の光」前後に產み落したといふ感がするのである。「磯の光」は實に敬虔なる若き命の凝結體である。感激が深く沈潛して、現るるものは、かなしき心の法悅に入れる涙である。所謂若き命の現れは當今元氣な青年に皆ある。「磯の光」の如き敬虔な心を求むるに至つて多く類を發見し得ない

のである。大正六年以後のは「磯の光」よりもずつと落著いて人生の實儘に踏み入つてゐるの觀がある。其邊に中村君の主なる一時期を劃する所があるやうである。大正六年の「歸住」以下諸作、數は少ないけれども君の新しく潛み入つてゐる心が隨所に現れてゐる。澄んだ心が益々徹つてゐる。小生は「磯の光」以前よりも以後の歌を尊重するやうな心の傾きを今所有してゐる。

此の選集を選ぶについて明治四十一年から大正九年まで十三年間の諸作に目を通した。(馬鈴薯の花、林泉集及び以後のアララギ第十三卷第五號迄) その中から二百首を選び

出すことは尠からぬ難事であつた。はじめ四百餘首までは割合に容易に進行した。それを三百十七首にし、更に二百四十七首にするに及んで殆ど困惑した。過剰の四十七首を何れと定めることは實際に於て不可能なのである。この所で仕方なく作者から一通り目を通してもらふことにした。責任を外らさうとしたのではない。責任が重過ぎる心地がしたのである。それから後少しの休息をして更に二百七首までにした。この最後の過剰七首を棄てるためにまる二日と半日を費した。棄てたのはすべて棄てたのではない。暫く原據の歌集其他へ預け入れをして置いたといふ心持であ

る。實際連作中の一二首を摘出したやうなのは、それを他の諸作から切り離したために連作の效果を滅却したやうなのも少くない。これは二百首選といふ制限から來る餘儀ない缺陷である。斯くして選出した此歌集が果して中村君の代表歌選として遺憾ないものであるか何うかといふことになると作者に對して甚だ申訣ない感が湧くのである。只小生としては斯樣にして中村君の歌につき從來にない詳しい見方をしたことが尠からず小生を稗益したことを感謝するのである。さうして斯の作者からこの機會に小生の歌をも選んでもらふことの出來るのは現世に稀有な幸福であると

いふ感に充ちるのである。

大正十年六月二十八日　諏訪湖畔柿蔭書屋にて

島木赤彦

中村憲吉選集

馬鈴薯の花より

竹

山の根のけむり立つ家の棟のうへに孟宗の藪しだれかかれり

明治四十一年

椿

つばき垣にたてかけ乾せる疊にし花ころびて落ちて前にたまれり

櫻島すその松山松まじり咲ける椿にうぐ
ひす啼くも

吹上の濱

松みながが砂にうもれて梢(うれ)ひくくわが眼の
ほどにつづく松原

明治四十二年

海の邊にかへり見すれば濱のうへ砂高み
かも山僅か見ゆ

野間嶽

飛ぶ鳥の影も小ぐらくつつみ持ちて霧は
流るる松の谷間を

堀内卓を悲しむ

ある夜は泣き居たるあとの眼を恥ぢて繕
ふ汝れをいたしく思ひき　明治四十三年

もの皆に響き足らはずこの頃の消なむ心
に汝を戀ふるかも

寒き石

夕日かげ寒けき崖を石のいろの上に物う
ごく小鳥にてあり　明治四十四年

曇り風

いらいらする心を街に出であゆみ曇りに
歩む我うつつなに

物賣りの戯(たは)けのうたを聞きければ眞晝の
街に足もすくみぬ

飴賣唄の息つぐ見ればくしやくしやの顏
ほどけ來て目鼻ひらきぬ

薄ら夜

宵ふけて吾がゆく野べを草の家にくくと
雞(とり)啼くあはれ月夜を（輕井澤驛）

亡き人を(も)へばさびしもゆく野べに風ほ
の白き夜のくだちつつ

新芽立つ林にこもる家のかべ月照りくれ
ばしるけく浮くも

しらじらと夜の更けゆけば新芽ふく森に
こもりてぬる家を思ふ

青葉の息

山中のしづけき町に蟬の音の四方よそそ
ぎてくれ入りにけゝ

峡のいろ

蒼黑く暮れゆく峡にこもる瀬にきき入り
ければ現(うつつ)にはあらず

谷の奥に蒼く消ゆべき旅の身をすずろは
かなくかへり見にけり

靜けさの極りぬれば谷あひを身ごころ失
せてやすけく行くも

秋のはじめ

秋づけば水際（みぎは）の草に丹（に）の花のこもらふほ
どの戀に遇ふかも

青葉道

入日映ゆる濡れ葉のかげやもの言へばわ
が持つ傘にふるへやさしも

雨の夕暮

夕ぐれの雨をひさしく見つめたる吾れのまなこよつめたかりけり　大正元年

道傍の雨に暮れ行く繁木よりちちと短く鳥啼きたちぬ

雨やみて既(すで)て螢の見ゆる野をわが人力車(くるま)ひとつ鳴りて行くかも

稻の月夜

ひとり行くこの月の夜に見えくるはみな吾が知れる人の家かも

稻の露に濡れつつ歩む夜のはだへ座ろに
ひとに寄りたくなりぬ

憂愁の都會

物の音ひと行く影もおぼほしく曇りへだ
たる街べを行くも

鋪石の上に曇影ふみつつたまたまに己が
足の音にさめ返るかな

何はなく寂しき街にぞろぞろと人ながれ
つつくもり行きけり

暁は動く

戸のそとの世のあかつきは海に似てとほく寂しく動き行くらむ

郊外初冬

ひさびさに街出でくれば郊外に落葉するものは盡くせりけり

藪原

汽車が峡間の驛にとどまれば釜鳴りのするるが山にさびしも

雨久花

大正元年九月十日。霖雨の霽るるを待ちて漸く木曾谷藪原の宿寺を發し、汽車にて桔梗ヶ原を

すぐ。この地もと亡友好遊の地。雨後にして高原は秋風あまねく白く、路花また開眼、頻りにわが旅情を悲しますものあり。すでに松本の夕巷に着きてくだれば、たまたま行人の近く帝都に於て行はるべき明治大帝御大葬の噂するものあるを聞く。予は今更ながらまことに時勢の倏

忽として去れるを覺えざるを得ざりき。嗚呼、人命もまた遂に永へなることを得べけんや。すなはち愁然として、薄暮未だ點燈せざる亡友の家門をくぐりてその遺族に對ふ。

道みちの秋野に花はゆらぎたれど尙ほ眼をとぢて見たきものあり　　大正二年

花をゆりて寂しく吹きし野のかぜに人行
けりしが影のごと思ほゆ

ひと逝きて三年といへばその母と夕べし
づかに居るこころかな

このゆふべ母のまな子となりたれば心こ
とごとなみだに濡れぬ

萠芽

ひさしくて見ればかかげし妹の髪のやや
解れ垂りて慣からなくに

眼痛し

世のものに久しく遇はでありし如こころ
さみしく街ゆきにけり

深夜

街の灯はとほく光りて停電の電車いくつ
もとまり居るかも

大き都會は眠るとすらむ夜の路に哀れな
る反古ひとつ轉がり行くも

秋の光

手はわれは握るとしつつ氣のつきぬ道に
ゆれたる我亦香のはな

御茶の水景情

秋淺き木の下道を少女らはおほむねかろく靴ふみ來るも

街の砂の日ごと降り來て久ならむ壕小舍(こや)の屋根に積りゐる見ゆ

濠底に小舍の子ひとり遊びゐて何時までも經(た)てどのぼり來ぬかも

夕映の照りとどかざる眼のまへの坂をばくらく人かげゆくも

冬より春へ

雪野原とほき窪みに晃らかに夕さり來れば町の灯が見ゆ（淺間温泉より松本を望む）

夜の重さ欠呻したればふと我れよ去るものありて安けくなりぬ

伽羅沈香を買はんと市に出でし夜騒亂のあるを見に行きにけり

かりそめの身の過のことごとく世になやましく春立つらしも

林泉集より

柑橘の庭

柑橘のあかるく熟れし奥庭は雨ながら晝
戸を鎖したり

明治四十二年

窓おせば鳴きゐたる蟇がなきやみぬ灯に
かがやきてしとど雨降る

ゆふべ

愛しくも握りしめたる玉蜀黍の幹のふく
らみに稚き實こもり

大正二年

病院の庭

樹に滿つる光を見れば清稚きをとめのい
のち死なすに堪へんや

大正三年

泣きながら母と我れとは病室のせまき疊
に夕餉せりけり

峡驛の葬禮

葬列のぐんじゆうの顔日に向きて驛路を
きたる赭く眞面目に

うまや路の屋並の上の山畑にとぶらひ出
でてのぼりゐる見ゆ

鏡壁

夜の珈琲店(カフェー)かがみの壁に燈はふかし食卓
白きなかより對りば

夜ふかき鏡のまへに酒をのむ我れの眞顔(まがほ)
のうつつ悲しき

洲崎附近

廢れたるごとき廓(くるわ)のひそか雨海どりは下
りて路に飛べるも

梅雨ふかき廓にそへる堀のみづ芥をうけて潮香かなしも

蒼き渚

はかな言ゆめうつつには信ぜねど在るにあられずあをき潮騒(しほさゐ)

潮風の夕かぎりなき沖つなみに眞帆ただひとつ流れて行くも

眉間の光

新芽立つ谷間あさけれ大佛にゆふさりきたる眉間(みけん)の光

夕まぐれ我れにうな伏す大佛は息におも
たし眉間の光

暮れそむる淺山かげに大佛の膚肌はあを
く明からむとす

大佛の乳見そむれば松の間が眼にわづら
はし松葉こまかに

新綠の海岸

磯畑の黄ばめる麥へ藻の香吹きゆたかに
吹きて夏ならんとす

このゆふべ山にて聞けば麓田に麥藁を焚く音のま近かさ

宿かへて錢やや乏しおぼつかな向うの岬に蟬の鳴き居り

移り來ていくだもあらず春蟬は岬の松におとろへにけり

梅雨の渚

足もとの磯を染めたる夕づく日泡沫赤く生れゐたりけり

雨ながら背戸の濱べに蟲鳴けりあはれと
人に告げやらましを

山峽の夏

夕まけて風ひやびやし峽の驛に瀬音立ち
くも裏の川より

さ庭べに往來をやめぬ蜻蛉ゐて白壁のう
へに夕日移るも

夏の夜をこの峽ふかく旅の人行きやめざ
らむ星の明りに

馬柵の霧

こんこんと馬柵をくぐる水きこゆ草の中
より霧立ちながら

霧ふかき馬柵のうちは靜かなり馬ふたつ
口を寄せて擦りゐる

晝の燈

日にけに光をふふむ風ふけば息なやまし
く夏さりにけり

大正四年

日竝べてみんなみいたく吹きぬれば思に
あまる物言ひにけり

おもひ出て幽かにねたむ葉がくりの晝の
電燈(あかり)の顯(ひ)しけなくに

樹のかげに晝の燈うつし熱き葉の匂ひを
嗅ぎて息はづみけり

悼左千夫翁

日ならべて膚にねばむ曇り風居ても堪へ
じも亡き人思へば

曇り風ふみ月の風は吹けれども土にさみ
しく君が音(ね)ぞせぬ

くもり風うつつに吹きて居るゆゑにこと
ごとく物の音の遙けさ

淺宵裸馬の列

列りて行く馬みな裸馬なりほこり立ちた
る灯のなか行くも

街の辻の燈火のなかを疲れたる馬の太頸
竝び行く見ゆ

馬の列の馬の一匹立ちとまり街のあかり
に埃搔きけり

寒潮堀

縁日の人ごみの中に灯はくらし潮風著く
吹きにけるかも

構橋晩景

大河口(おほかはぐち)の夕焼がたの船工場(ふなこうぢやう)音をやめたり
その重きおとを

ひろびろと河の口より夕映す構橋(こうけう)にちか
づく大き帆のかげ

ひろびろと河の口より夕映す橋のたもと
の路樹一ぽんに

ひろびろと河の口より夕ばえす橋に向き
たる街の遠くに

夕づく日構橋のなかを行けりしが我が足
もとに帆を巻く音す

橋づめの街樹に吹ける海のかぜ夕かたま
けて風ぎにけるかも

千鳥橋

倉庫(くらなみ)竝のおくがの堀へ夜ごもりに入りゆ
く船の水棹のおと

河岸倉に人のまだ居る聲さむし岸にみち
たる小夜の潮香に

河岸船に天窓あけし灯のあかり女のぞき
て物を言ひつも

假り橋を來る老婆ありの夜の目には太葱一
ぽん手に持ちしろし

倉庫街

深川に夜を來つれば街ひくし潮風をおぼ
ゆ近くの空に

倉かげに馬は暗しもしみじみと尿を終へ
て蹄の音すも

磯の光

身はすでに私ならずとおもひつつ涙おち
たりまさに愛しく

大正五年

もの思ひおもひ敢へなく現つなり磯岩か
げのうしほの光

わだつ海のうしろの岩のかげにして妻に
宣らせる母のこすゑすも

短か世のつまと思へばうら愛(かな)しひとりの
時の涙しらすな

磯(いそ)榁(ひろ)の樹皮(こがは)こぼるる日のさかりおのづか
ら悲しひとり思へば

○

來しかたの悔しさ思へば畫磯になみだ流
れて居たりけるかも

おぎろなき息をもらせり内の海八十島か
けに水のひかれば

光る海の珠拾ひつつ磯かげの山かた附き
て行かす母かも

磯を行くひまだに母はあはれなり我が新妻を愛しみたまへり

おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の
珠も母と拾へば

たまさかに歡ぶわれと思へかも畫磯のう
へに涙とどめざらむ

○

山かげの海べを見れば松の間にゆふべ寂
しく草を刈る人

ひた寂し聞きつつ居れば松山の夕海岸に
草を刈る音

島山を下ればさみし隠り江のむかうに暮
るるふかき松山

このわたり家居は何處ぞ草かりて磯松山
に人隠れたり

妹として山にて聞けばかすかなり山した
海のゆふ潮のおと

離れ島磯わにのこる夕光かつがつ妻が言
惜しみける

雉子

春雨のこの降る雨の木がくりに雉子啼く
なり遊べるらしも

雨ごとに雉子の徑のわなの木の芽を吹き
緩む春さりにけり

椿の嵐

洋館の椿をゆする疾風(はやちかぜ)ピアノ鳴りつつ彈(だん)音(おん)はやし

限りなく春の嵐に吹きゆするる赤き椿は眼を疲れしむ

春の鴉

街なかの埃しぬぎて來たるらむ光りつかれてゐる鴉はも

あかね刺す眞ひる明けれ大がらす眼ぢかく下りて啼かざりにけり

亦根さす畫に啼かざる大鴉もの忘れ人に
似てしたるものか

藤なみの花

菅だたみ親しくねむる新むろの鉢の藤な
み總とけにけり

新室に藤なみの花咲き垂りていく日しづ
かに籠りたるらむ

日の暮れの障子あかりに埃吹き久しく思
ほゆ床の藤なみ

草刈舟

五月雨の草しげれれや大御城(おほみしろ)み濠に居り
て草を刈る舟

青臭

現し身を怪しく思ほゆ深わか葉われの素
肌に青くひかれば

潜(くぐ)まりて小鳥は啼けり深わか葉蟲のうま
るる臭氣(しうき)を感ず

わか葉より小鳥墜(お)ちつつ羽(はね)ふりて相交歡(あひよろこ)
べりその下草に

綠蔭製藥

若葉深くわが入り來れば製藥の匂ひしたりぬわが眞近くに

春ふかき若葉かげより製藥の匂ひのするは寂しかりけれ

槻の道

大竝樹槻よりわたる若葉かぜ我がはなひりて寂しくし覺ゆ

大槻竝み濃き芽をふけば赤れんぐわ敎室のとほりは夏になりたり

入り日さす槻の葉かげに教室は戸を鎖したり深きゆふ戸を

槻の道ゆふ日が霧ればもの蔭に醫科大學の鶏なきにけり

槻のかげ教室通りの夕扉よりひと出て行けり扉の締まる音

青靄の夜

舗道の家壁のかげの青き靄夜くだちながら人の居るころ

乾きたるこの舗道に錢おとし四邊(あたり)にひびく靄のふかきに

夜ふかき路樹に觸(さわ)ればぬくくして萎(しな)へし葉には塵たまりたり

街なかに風ふきたれば青き靄ちかくながれて居たりけるかも

星の尾

わくらばに眼にとどまれる夏の夜の星よりかなし値(あ)ひがたからむ

向日葵花

曇り影すでに深かけば日まはりの大輪(だいりん)の
花は傾きにけり

あからひく大向日葵のもとに立ち息づき
餘すふかき曇りを

ちかづきて曇りのふかき向日葵の熱ある
花に顔を寄せけり

くもりたる四邊(あたり)を聞けば向日葵の花心(くわしん)に
うなる山蜂の音

ちまたより埃にほひて流れたり曇りのふ
かきこの庭ぬちに

夏の土ふかく曇れりふところに蟬を鳴か
せて童子(わらべ)行きたり

林泉集以後（アララギ大正九年五月號迄）

雨蛙

土間のうへにつばめ下れり梅雨ぐもり用もちて今日は人の來らず　大正六年

家ぬちの音靜みかも蛙ひとつこゑ透りなく奥の庭より

消息をあまた書きしるしがもの言ひて言葉つ
たなき寂しさ湧くも

忘れたる書餉に立ちぬ部屋ごとに暗くさ
みしき疊のしめり

いそがしく蛙は庭に鳴き止みぬすなはち
雨の家めぐる音

夕　雨

夕ぐれは端居の鍋にもの焚きて食すによ
きほど雨したたれり

砌よりこほろぎ鳴けり夕雨にやや〻濡
れし鷄頭のはな

たまさかの雨に落ちつく吾が夕餉妻にく
はしき物言ひにけり

背戸をゆく下男に用を言ひとめて答聞き
てをり雨にぬらしぬ

秋の雨外暮れがたみ行くひとの傘のうへ
にはまだ明りあり

歸住

山かひの秋のふかきに驚きぬ田をすでに
刈りて乏しき川音

日のくれて我家につけば家裏よりさみし
き川の音のきこゆる

峽の家古りし洋燈を今も釣れり久びさに
父と膳を並ぶる

けながき冬來向へば山がひの家にも人に
も逢へがたく倦めり

朝の間はこころに忘れかぎろひの夕べと
なれば悔いつつぞ居る

忘れたる十呂盤算になづみつつ村人の顔
を日日に見知りぬ

砲車隊

峡驛の家低みかも騎馬兵の頭ならびて軒
べを行くも

宿驛路をならびてとほる兵たいの顔をさ
みしみいちいち見るも

軒による馬のむれより家ぬちへ寂しく匂
ふけだものの汗

秋づけば必ずとほる砲兵隊の今日もとほ
りて國越えにけり

氷川

塀越えて河風さむし夕かたに裏の座敷に
立ち入りぬれば

大正七年

日ならべて寒き風かも河の瀬に五百津岩
群は濡れてこごれる

雪の日

片戸鎖し部屋はひそめど外のゆき障子へ
あかり宜おちつきぬ

足もとの凍つく夕となりぬれば山した川
の音のかそけさ

山守

秋づけば山のぬすみのまた増加えぬ今朝
も言告げ山守來る

大正八年

荷縄下げて山へ行く人とほりたり霧の中
より我に會釋す

こと細かく山のぬすみを云ひて來るこの
山守もまた物をぬすめり

この村に貧しきが多し天然の山に入りて
半は食を求むる

茱萸樹

川ばたに白き芽を吹く茱萸一本子供來り
て虐げて去れり

春といへば一度しひたげし河べ茱萸枝を
おこしてまた葉を着けぬ

山下をしづかに落つる堰のおと山より川へくだる鳥ひとつあり

新みどり裏山したの川澄みて水底に石の見ゆる靜けさ

山川に白く咲きたる茱萸のはな河鹿鳴くべき時にいたりぬ

燕

雨くらし長押の額にとまりたる燕の羽より雫おちけり

家しづみ我がよべる聲におどろけり酒庫の遠くより人の答ふる

秋情

夕かげの小藤がもとの屋敷川せせらぎ澄みて秋づきにけり

霧にぬれて山守來りふところより栗めづらしく疊にこぼせり

梅雨ぐもり

梅雨ぐもりふかくつづけり山かひに昨日も今日もひとつ川音

大正九年

ひさしく拭布をかけぬ本棚のうるしが上
にかびふきにけり

家のうちの明るき所に膳をするおくれし
飯をひとり食みけり

雨のおと蛙が鳴くに箸とめぬ障子の外に
鳴く處ちかし

家ぬちへこゑの透りて鳴く蛙襖みな開き
て奥庭あをし

初雪

酒つくるみ冬とおもふ心せはし雲ふる今
朝の洗場のうた

聲かけて水擔きてとほる男らの向うへい
そぐ臀さむし

大寒

あやまちし昨夜の水に凍つきたる朝戸敷
居に湯をそそぎ繰る

居すくめて朝あさ妻に顏をふかす幼な兒
ふたり頰霜やけぬ

部屋ごとの朝の炬燵に釜場より大十能(おほじゃのう)に
火を運ばしむ

雪の日の店にくつろぎ物書きぬ障子のあ
かりとどく炬燵に

樽負ひて人はいり來ぬ小簑より乾ける土
間に雪をこぼして

米倉の小戸の霞網(かすみ)に追ひ拂りし寒(かん)の雀を
あまた括りぬ

大正十年九月五日印刷
大正十年九月十九日發行

「中村憲吉選集」
定價壹圓參拾錢

著者　中村憲吉
東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者　合資會社アルス代表者
北原鐵雄
東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者　鈴木泉藏
東京市小石川區久堅町四十五番地

印刷者　山本源太郎

發行所　東京市神田區仲猿樂町十五番地
合資會社　アルス
電話九段二一六九番
振替東京二四八八八番

アルス名歌選

アルス名歌選は歌壇未曾有の新計劃の下に刊行せらるゝ互選短歌叢書にして、互に其全作中より代表的とする傑作二百餘首を選出し、尙其の作風を論ぜる長篇の序文を附せるもの也。實に本叢書は明治大正時代の短歌を後世に傳ふべき唯一の選集と云ふべし。

恩地孝氏裝幀（著者自筆色紙各一葉入）

羽二重色刷表紙

菊版半截極美本

アルスの名歌選

第一編 前田夕暮選
若山牧水選集

第二編 若山牧水選
前田夕暮選集

定價各壹圓貳拾錢　送料各六錢

第三編 吉井勇選
與謝野晶子選集

第四編 與謝野晶子選
吉井勇選集

定價各壹圓參拾錢　送料各六錢

アルスの名歌選

第五編
中村憲吉選
島木赤彦選集

第六編
島木赤彦選
中村憲吉選集

定價各壹圓參拾錢　送料各六錢

アルスの名歌選

別續刊輯
齋藤茂吉選
正岡子規選集

別續刊輯
島木赤彦選
伊藤左千夫選集

別續刊輯
古泉千樫選
長塚節選集

アルス名歌選

北原白秋選集	齋藤茂吉選集	古泉千樫選集	土田耕平選集
續刊	續刊	續刊	續刊

697

終